

## はじめに

ICCS は内外から著名な中国研究者をお招きし、毎年国際シンポジウムを開催しており、2008 年度は「中国をめぐる開発と和諧社会」と題して、12 月 5 日～7 日の三日間にわたって本学車道校舎で開催したが、実り多い報告と討論を行うことができた。会場には一般の方も多数お見えになり、それぞれのお立場から、活発な質問や意見交換に参加していただいた。

「中国をめぐる開発と和諧社会」という課題は①中国問題が中国だけの問題ではなくなっていること、②中国における開発の持つ意味の「複義性」、③「和諧」(協調・調和)の意味、④「開発と和諧」の関連はなにか、と分けることができることを念頭に、報告と意見交換を通じて、現局面における中国の広い意味での諸相と実態の解明を試み、その持つ課題についての打開の方向を探ろうとする意図を持っていた。

これに政治、経済、環境、文化等々の専門的な分野から議論をしあったのであるが、これら各分野の専門的性格から、同質の結論や議論の方向性をまとめあげることはもちろんたやすいものではなかった。

しかしこうしたなかで、一脈の希望が生まれたことは一つの成果だった。それは、「和諧」が、課題にたいする中国政府によるある種の「解決策」を示すものであると理解すれば、その解決策のあり方や内容がそれでよいのかどうかを議論することは、互いの立場が異なるものの、議論をかみ合わせる上で積極的な意味を持つということである。そして、今回の議論のなかでは、あきらかに、そのことを意識した報告や議論がかなりのウエイトを占めたことは強調されてよいと思う。つまり、「理解すること」から解決の方向性を提示することが、あらゆる分野で必要になっているという意識が具現された議論が少なくなかったのである。

ではどんな議論の組み立てがそのような方向性を提示するものなのか、一例を私の関心ごとである中国農業部門についていえば、次のようなものである。つまり、私の考えでは、中国にはさらなる経済成長が必要であるが、その成果と政策的な強化を農業部門に分配する仕組みを構築し、農業部門を市場主義的協同組合、農業私企業、個人農だれもが自由に担うことができる制度の「社会的経済」論的な構築が農業再建にとって重要、ということである。

詳しくは述べないが、いうまでもなく「社会的経済」理論は、新自由主義に対立する西欧的な、かつ行動論的な概念として成長してきたものである。最近において目立つ西欧とアメリカの対立の根底には、このような考え方が西欧で浸透しはじめたことが影響している。新自由主義の限界に向き合い、中国社会が安寧を希求するに当たり、「社会的経済」はきわめて有効な概念となりうる。

西欧概念である「社会主義」を現実には活かそうとしてきた中国で、ポスト・モダン社会のあり方を見出そうと苦悶した結果得られたこの概念を、将来の国のあり方を探る「暗夜の一灯」として目を向けることを西欧的であるとの理由で拒むとも思われぬ。

おそらくこのような視角は、中国の周辺の国々が遅からず当面する課題となると想像できるが、この点にこそ、今回のシンポジウムの課題が「中国をめぐる・・・」とした重要な根拠がある。つまり、課題が国境を越えて共有される時代が到来したということである。しかし本報告書は「中国をめぐる開発と和諧」について、じつにさまざまな観点から語られており、読み物としても面白いと思う。

なお本報告書は、紙面においてその内容を忠実に再現しようと努めたものであるが、実際は「紙面」ではなく「Web 上において」といった方がただし。というのは、今年から、本センターは原則的に、研究成果等やテンポラリーな研究成果はすべて Web 上に公開する方法を採用し、紙媒体による印刷物は作らない方法に改めたからである。時代の流れでもあり、そうした方が多くの方々の目に触れる機会も格段に多くなると見たためでもあり、経費の節約を図るという内部事情によることでもある。

最後に、本シンポジウムにご参加くださった多くの方々に本センターを代表して感謝し、かつ、報告書に仕上げるに際し、入念な原稿チェックまでいただいた参加者の方々に厚くお礼申し上げます。本報告書が現代中国研究の推進や発展に、いささかでもお役に立つことができれば幸いです。

2009 年 3 月  
愛知大学国際中国学研究センター  
所長 高橋五郎